

国立国語研究所学術情報リポジトリ

「は」の後接から見るとりたて詞の否定呼応現象

| | |
|-----|---|
| 著者 | 井戸 美里 |
| 雑誌名 | 国立国語研究所論集 |
| 号 | 15 |
| ページ | 43-54 |
| 発行年 | 2018-07 |
| URL | http://doi.org/10.15084/00001595 |

「は」の後接から見るとりたて詞の否定呼応現象

井戸美里

国立国語研究所 研究系 理論・対照研究領域 プロジェクト研究員

要旨

本稿の目的は、「否定的特立」や「意外」を表すとりたて詞「など／なんか」「まで」を対象とし、これらのとりたて詞にはそれぞれ、文末の否定辞と呼応関係を持つものと持たないものという統語的特徴が異なる2つの用法があることを指摘することである。本稿では、この2つの用法は、否定との呼応関係を持たないものは内容語（[+Lexical]）の素性を持ち、呼応関係を持つものは機能語（[-Lexical]）の素性を持つ異なる語彙項目であるとするので、現象を自然に説明可能であることを指摘する。さらに、否定との呼応関係を持つ「など／なんか」「まで」と持たない「など／なんか」「まで」は、無関係な2つの語彙項目なのではなく、対比の「は」の後接という現象をとおして対応関係にあることを指摘する*。

キーワード：とりたて詞、否定呼応、「など／なんか」、「まで」、対比の「は」

1. はじめに

本稿の目的は、「否定的特立」や「意外」を表すとりたて詞「など／なんか」「まで」を対象とし、これらのとりたて詞には、1つの形態に、文末の否定辞と呼応関係を持つものと持たないものという統語的特徴が異なる2つの語彙項目があることを指摘することである。さらに、否定との呼応関係を持つ「など／なんか」「まで」と持たない「など／なんか」「まで」は、異なる語彙項目でありながら無関係なのではなく、対比の「は」の後接という現象をとおして対応関係にあることを指摘する。

「否定的特立」を表す「など／なんか」、「意外」を表す「まで」には、(1)～(3)のような例が該当する。(1)(2)の「など／なんか」からは、「主は本来、私の足を洗うべきではない」という話者の評価や「隣の部屋に映画女優は来てほしくない」といった評価が読み取れる。同様に、(3)の「まで」からは、「ワイドショウは普段、イチローとランディ・ジョンソン投手との対決は取り上げないだろう」という話者の予測が読み取れる¹。

* 本稿は、JSPS 科研費（課題番号 17H07069）の助成を受けたものであり、国立国語研究所機関拠点型基幹研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」（プロジェクトリーダー：窪田晴夫、「とりたてて表現の対照研究」班リーダー：野田尚史）の研究成果である。また、本稿は、筆者の博士論文「とりたてて詞の統語と意味から見る日本語否定極性表現の研究」の一部について、第166回 NINJAL サロン「ハの後接」から見るとりたて詞の否定呼応現象」（2017年10月10日、於：国立国語研究所）でコメントを受け、内容を修正したものである。

¹ 以下、例文中の下線および（ ）による注記は筆者による。また、出典表示のないものは作例である。『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）』からの例文については、出典としてサンプルID・著者名・書名を記す。

- (1) ペテロは、あのように愚かな正直者でありますから、不審の気持を隠して置くことが出来ず、主よ、あなたはどうして私の足などお洗いになるのです。と多少不満げに口を尖らして尋ねました。… (中略) …ペテロは尚も頑強にそれを拒んで、いいえ、いけません。永遠に私の足などお洗いになつてはなりません。もったいない、とその足をひっこめて言い張りました。

(太宰治『駢込み訴え』)

- (2) 当初は「イヤだわ、映画女優なんかが隣に来て。きっと、毎晩パーティなんかしてうるさくに違いない」と眉をひそめたようだ。

(BCCWJ サンプル ID : PB37_00204 斎藤明美『高峰秀子の捨てられない荷物』)

- (3) 日本のオールスター戦の話題など始球式に登場したタレントのファッションしか取りあげなかったワイドショウまでが、MLB のオールスター戦でのイチローとランディ・ジョンソン投手との対決の話題をとりあげました。

(BCCWJ サンプル ID : PB37_00204 玉木正之『スポーツ解体新書』)

本稿が対象とするのは、このような話者の評価や予測に関わる「など／なんか」「まで」である。このような「など／なんか」「まで」は、否定文にも肯定文にも現れる。次の(4)(5)は、いずれの例も「試験前には、漫画は読むべきでない」であるとか「亀は普通、人間である「俺」のことは見てはいない」といった話者の予測や評価が読み取れる。このような事情から、(4)(5)の「など／なんか」「まで」は、これまで特に区別されることなく分析されてきた。

- (4) a. この大学の学生は、試験前なのに、のんきに漫画などを読んでいる。
b. よりにもよって、映画女優なんかが隣に住んでいる。
c. 驚くことに、ワイドショウまでが2人の対決を取り上げた。
(5) a. (その亀は)もちろん、本当は俺のことなど見ていないに違いない。

(BCCWJ サンプル ID : PB59_00088 日明恩『埋み火』)

- b. もはや2人の間に歯の浮くような言葉なんか必要なかった。
c. ニワトリ小屋なんて、いちいち形まではおぼえていないのが普通だ。

(BCCWJ サンプル ID : PB49_00063 倉知淳『ほうかご探偵隊』)

しかし、本稿では肯定文に現れたときの(4)と否定文に現れたときの(5)の「など／なんか」「まで」は、統語的特徴が異なる2つの異なる語彙項目であるということを指摘する。

本稿の構成は、以下のとおりである。2節では、先行研究を概観し問題点を指摘する。3節では、「など／なんか」「まで」には統語的性質の異なる2つの用法があることを指摘する。4節では、「など／なんか」「まで」に対比の「は」が後接したときの特徴的なふるまいを記述する。5節では、4節までの記述の一般化が「など／なんか」「まで」以外のとりたて詞にどれだけ適応可能か観察する。6節はまとめと課題である。

2. 先行研究

2.1 とりたて詞とは

「とりたて詞」や「とりたて助詞」と呼ばれる語群は、「だけ」「さえ」「も」、対比の「は」などが該当し、(6)のような特徴を持つものとして記述されている。(4)(5)の「など／なんか」「まで」は、(6)の特徴を満たすとりたて詞として分類される(沼田 1986, 2009 他)。

- (6) とりたて詞とは、文中の種々な要素—これを自者と呼ぶことにする—をとりたて、これに対する他の要素—これを他者と呼ぶことにする—との論理的関係を示す語である。

(沼田 1986: 108)

とりたて詞は、山田(1936)が指摘するような「係助詞」「副助詞」というカテゴリを否定し、それらに属していた語を含む複数の語を、(6)の特徴といくつかの統語的基準で再カテゴライズした語群を指している(沼田 1986, 2009)。しかしとりたて詞は、かつて異なる語群として分類されていたものを含むことからわかるように、その内実は一様ではない。とりたて詞の共通した特徴を捉えつつ、「係助詞」「副助詞」の違いとして論じられてきた統語的な違いにも、何らかの説明を与える必要がある。

例えば、とりたて詞はそれぞれ属する文法的階層が異なり、さまざまな述部と呼応関係をなすことが指摘されている(野田 1995, 佐野 2001, 2007, 茂木 2004 他)。野田(1995)では、「例示」を表す「でも」が「意志を表すムード」と呼応関係にあることを指摘している。(7a)は、述部が「飲もう」という形式になっているため、「でも」と「意志を表すムード」との呼応関係が成り立ち自然な文になっているが、(7b)は「飲んだ」という単純な動詞の過去形になっており許容されない。

- (7) a. お茶でも飲もう。
b. *お茶でも飲んだ。(野田 1995: 8)

野田(1995: 5)では、このようにとりたて詞が位置する文法的階層を明らかにすることを、「以前の副助詞と係助詞の区別をもっと細かく精密に考えること」と位置づけている。

2.2 「など／なんか」「まで」の階層

本稿が対象としている「など／なんか」「まで」については、茂木(1999, 2004)、佐野(2001, 2007)、沼田(2009)などで詳細な記述や統語的な一般化が試みられている。茂木(1999, 2004)、沼田(2009)では、(5)のような否定と共起した「まで」「など／なんか」について、とりたて詞が否定より狭いスコープをとる解釈が存在すると指摘し、(8)(9)のような例を挙げている。

- (8) 親にまで打ち明けなかった。

解釈：信頼できる他の人(「友人」等)には打ち明けたが、「親」には打ち明けなかった。

(茂木 2004: 80)

(9) 幸ちゃんとなど 一緒に遊ばない。

(沼田 2009: 240)

(8) (9) の例は, (10) (11) のようにパラフレーズできるように, 否定よりも狭いスコープをとっていると分析されている。

(10) 「親にまで打ち明ける」ということはしなかった。

(11) 「幸ちゃんなどと一緒に遊ぶ」ということはしない。

もちろん (8) の「まで」は, 「最も信頼できる「親」にも打ち明けなかった」(茂木 2004: 80) という解釈も可能である。茂木 (2004) では, この解釈は「まで」が否定よりも広いスコープをとっていると指摘している。茂木 (2004) は, このような意味解釈が統語構造と対応関係にあるという仮定のもと, 「まで」には2つの呼応位置が可能であると分析する。つまり, 否定辞より統語的に高い時制辞句 (TP) と呼応関係にある位置と, 否定辞より統語的に低い述語句 (PredP) と呼応関係にある位置の2つである。

(12) [[[まで PredP] (NegP)] TP]

この分析に従うと, (5c) の「まで」は, 否定より低い位置と呼応関係にあることになる。また, この分析を「など／なんか」にも適応すると, 「など／なんか」もまた (12) のように否定より狭いスコープをとりうることになり, 否定辞より低い位置と呼応関係を形成しうると仮定される。

しかし, この分析には問題点がある。もし, とりたて詞と否定とのスコープの関係が異なるだけであるならば, 「など／なんか」や「まで」の統語的性質は否定と共起した場合としていない場合とで変わらないはずである。しかし, 3節で詳しく現象を観察するように, 「など／なんか」や「まで」には否定とのスコープの広狭では説明できない現象が存在している。本稿では, 「など／なんか」や「まで」は否定とのスコープ関係が多義的なのではなく, 2つの統語的性質の異なる語彙項目が存在していることを指摘する。

3. 2つの「など／なんか」「まで」の特徴

具体的な分析に入る前に, 便宜的に (4) の「など／なんか」「まで」, (5) の「など／なんか」「まで」にそれぞれ名前をつけておく。(4a) の「など」を発した話者は「試験前には, 漫画は読むべきではない」と考えている。それにもかかわらず, 「学生が漫画を読んでいる」という事態が起きたことへの否定的評価を表している。一方, (5a) の「など」は, 「亀は普通, 人間である「俺」のことは見てはいない」という一般的な予測の内容を述べている。

野田 (2015) では, 「まで」の意味を「極端」と名付けて分類している。さらに, とりたて詞「なんて」について, 「極端ではないごく普通の要素」をとりたてているとして, 「反極端 (低評価・最低限・譲歩)」と名付けて分類している。(5) の「など／なんか」「まで」は, (13) に見るようにこの「なんて」と入れ替え可能であり, 「反極端」の意味を表している。

- (13) a. もちろん、本当は俺のことなんて見ていないに違いない。
 b. もはや2人の間に歯の浮くような言葉なんて必要なかった。
 c. いちいちニワトリ小屋の形なんておぼえていないのが普通だ。

ここではこの用語を用いて、(4)の場合を「極端」の「など／なんか」「まで」、(5)の場合を「反極端」の「など／なんか」「まで」と呼んでおく。

3.1 格助詞の後接

山田 (1936) は、「副助詞」である「だけ」「など」「まで」などの語群は格助詞が後接可能である一方、「は」や「も」などの「係助詞」はそれが不可能であると述べている。

- (14) 太郎 {だけ／など／まで} が学校にやって来た。
 (15) *太郎 {は／も} が学校にやって来た。

また、野田 (1995) では、あるとりたて詞がどんな成分をとりたてられるか、つまり名詞のレベル (語幹のレベル) をとりたててるのか、格成分より外側レベルをとりたててるのかの判断基準として、あるとりたて詞が格助詞の内側に入るか否かという現象を挙げている。

「など／なんか」「まで」についても現象を確認すると、「極端」の「など／なんか」「まで」は格助詞が後接する一方、「反極端」の「など／なんか」「まで」は格助詞が後接しないことがわかる。

- (16) a. この大学の学生は、試験前なのに、のんきに漫画などを読んでいる。
 b. よりにもよって、映画女優なんかが隣に住んでいる。
 c. 驚くことに、ワイドショウまでが2人の対決を取り上げた。
 (17) a. *もちろん、本当は俺のことなどを見ていないに違いない。
 b. *もはや2人の間に歯の浮くような言葉なんかが必要なかった。
 c. *いちいちニワトリ小屋の形までをおぼえていないのが普通だ。

つまり、「極端」の「など／なんか」「まで」は、語幹の階層に位置づけられる一方、「反極端」の「など／なんか」「まで」は、それより上位の階層で働いていることがわかる。

3.2 述部の制約

山田 (1936) では、副助詞は「用言の意義を修飾する」(山田 1936: 439) ものである一方、係助詞は「陳述に勢力を及ぼすもの」(山田 1936: 472) であると述べている。つまり、山田の分類においては、副助詞と係助詞は影響を与える文法的要素が異なるということである。さらに、野田 (1995)、佐野 (2001, 2007)、茂木 (2004) などの先行研究においては、とりたて詞はさまざまな文法的階層と呼応関係にあることが指摘されている。そこでの指摘によると、おおむね山田 (1936) で「副助詞」とされた語群は、動詞句やアスペクトなどの階層と呼応関係にある一方、「係助詞」とされた語群は動詞句やアスペクトの階層より高い階層と呼応関係にあるとされる。つま

り、とりたて詞の中には、動詞句やアスペクトなどの構造的に低い階層の要素と呼応関係にあり、より後ろの階層には影響を及ぼさないものと、より構造的に高い階層の要素と呼応関係にあり、述部に制限を与えるものとがあるということである。

「など／なんか」「まで」についても現象を観察すると、「極端」の「など／なんか」「まで」は述部に制限がない一方、「反極端」の「など／なんか」「まで」は、述部に疑問化詞を付けて Yes-No 疑問文にすると許容されないという述部の制限があることがわかる。

- (18) a. この大学の学生は、試験前なのに、のんきに漫画など読んでいるの？
 b. よりにもよって、映画女優なんかが隣に住んでいるの？
 c. ワイドショウまでが2人の対決を取り上げたの？
- (19) a. *本当は俺のことなど見ていないの？
 b. *2人の間に歯の浮くような言葉なんか必要ないの？
 c. *いちいちニワトリ小屋の形までおぼえていないの？

つまり、「極端」の「など／なんか」「まで」は、構造的に低い位置と呼応関係を持つ一方、反極限の「など／なんか」「まで」は、構造的に高い位置と呼応関係を持つということである。もし、「など／なんか」「まで」と否定とのスコープ関係が異なるだけであるならば、このように、述部に制限が現れたり現れなかったりするものの説明がつかない。ある要素と否定とのスコープ関係は、述部の制限とは無関係だからである。例えば、「全員」という数量詞は否定より広いスコープをとることもあれば、狭いスコープをとることもある。しかし、(20)に見るように、スコープの広狭によって疑問文にしたときの許容度に違いが出ることはない。

- (20) a. (ボイコットで、) 昨日の授業に、学生は、全員来なかったの？ (全員>否定)
 b. (初回の授業には必ず参加するよう伝えてあったのに、)
 履修登録した学生は、全員来なかったの？ (否定>全員)

よって、「反極端」の「など／なんか」「まで」が疑問文にできない現象には、否定のスコープの広狭以外の説明を与える必要がある。

3.3 分析

以上のように、「極端」の「など／なんか」「まで」は、構造的に低い階層と呼応関係を持つとりたて詞と同様のふるまいを見せる一方、「反極端」の「など／なんか」「まで」は、構造的に高い階層と呼応関係を持つとりたて詞と同様のふるまいを見せるという統語的な違いがあることを見てきた。先行研究においては、これらの「など／なんか」「まで」は区別されることなく、否定とのスコープ関係の違いによって論じられてきた。しかし、本稿の観察によると、「極端」の「など／なんか」「まで」と「反極端」の「など／なんか」「まで」は、統語的性質の異なる別の語彙項目であるということになる。また、(5)のような「反極端」の「など／なんか」「まで」は、否定より内側の構造的に低い位置と呼応関係にあるのではなく、むしろ構造的に高い位置と呼応

関係にあることになる。もちろん、「など／なんか」と「まで」の間にも違いは存在するが²、ここでは両者の共通点を捉えることに重きを置き、それぞれ「極端」の「など／なんか」「まで」は動詞句より内側の階層と呼応関係にあり、「反極端」の「など／なんか」「まで」は否定辞句と呼応関係にあると仮定しておく³。

では、両者の統語的性質の違いは、どのように分析できるだろうか。青柳（2006）は、とりたてて詞の分析においても、山田（1936）の指摘する係助詞と副助詞の分類が有効であると指摘する。具体的には、係助詞と副助詞の違いは、語彙素性の違いで捉えることができるとしている⁴。

青柳（2006）では、機能範疇と語彙範疇の区別に基づいて、係助詞が [+F(unctional), -L(exical)], 副助詞が [+F, +L] という素性指定を持っていると仮定し、係助詞と副助詞の共通性と違いを捉えている。これは、係助詞、副助詞がそれぞれとりうる焦点範囲の違いや助詞の承接順序の違いから、係助詞の場合は LF 部門での認可が同じ純粋な機能的素性を持つ時制辞 T によって、副助詞の場合は同じ語彙的かつ機能的な素性を持つ軽動詞 *v* によって行われるからであると説明されている。そして、副助詞のみが +L 素性を持つことについては、副助詞がもとは内容語であったものが多いことを挙げ、「その歴史的由来から内容語的性質を保持しているとしても不思議ではない」（青柳 2006: 50）としている。

この枠組みを用いることで、「極端」と「反極端」の「など／なんか」「まで」の違いを捉えることができる。「極端」と「反極端」の「など／なんか」「まで」をそれぞれ、素性指定が [+F, +L], [+F, -L] であると仮定する。すると、2つの「など／なんか」「まで」の二面性を [\pm L] という素性の対立で捉えることができる。

より具体的に（4）（5）を例に考える。（4）の「極端」の「など／なんか」「まで」は、「試験前には、漫画は読むべきではない」「隣の部屋に映画女優は来てほしくない」「ワイドショーは普段、2人の対決を取り上げないはずだ」といった、話者の評価や予測が読み取れる。しかし、そう考えていたにもかかわらずそれらの出来事が発生したことに対して、驚いたり否定的に評価したりしていることが読み取れる。つまり、「など／なんか」や「まで」は、その文が表す事態とは肯否が逆転した話者の評価や予測を語の意味として提示しているといえる。

一方、（5）の「反極端」の「など／なんか」「まで」もまた、「亀は普通、人間である「俺」のことは見てはいない」「2人には歯の浮くような言葉は必要ない」「普通、いちいちニワトリ小屋の形は覚えていない」という話者の評価や予測が存在していることには違いがない。しかし、こちらの場合は述部に否定辞を伴っており、話者の評価や予測の内容が、そのまま述部で表現され

² 特に、否定的特立の「など」については、井戸（2013）で詳しく論じている。

³ ここでは、2つの「など／なんか」「まで」の呼応位置が否定辞より高い位置か低い位置かという点だけの指摘にとどめ、これ以上詳しく2つの「など／なんか」「まで」の呼応位置を論じることはしない。なお、「極端」の「まで」の呼応位置に関する議論は、野田（1995）、茂木（2004）に詳しい。

⁴ 青柳（2006）は、係助詞と副助詞における格助詞の承接順以外に、当該のとりたて詞がとりうるスコープの広狭の違いを現象として挙げ、それらも統一的に説明可能であるとしている。しかし青柳が取り上げている係助詞は「は」と「も」のみであり、例えば否定と呼応する「しか」などについては触れられておらず、このテストがとりたて詞のどの範囲まで適応可能であるかは明らかでないため、ここでは観察の対象外とした。

ている。つまり、「反極端」の「など／なんか」「まで」の場合は、対象（「俺のこと」）と内容（「（亀は）見ていない」）をつなぐという機能によって話者の評価や予測を提示していると言い換えることができる。このように、「極端」の「など／なんか」「まで」と「反極端」の「など／なんか」「まで」の統語的な違いを認めることは、現象をより正確に捉えることができるのみならず、[±L]というシンプルな対立によって両者の対立を自然に説明することができるのである。

4. 2つの「など／なんか」「まで」と対比の「は」

3節までは、とりたてて詞「など／なんか」「まで」には、形態は1つでありながら統語的な素性が異なる2つの語彙項目が存在することを指摘してきた。青柳（2006）の指摘によると、とりたてて詞の中には、純粹に機能的な要素と、機能語としての特徴と内容語としての特徴をどちらも持ち合わせるものが混在していることになる。一方、3節で論じたように、「など／なんか」「まで」が1形態で素性の対立を体现していることを見てみると、とりたてて詞の中には、単に内容語と機能語が無関係に散在しているとは考えられない。この節では、「極端」の「など／なんか」「まで」と「反極端」の「など／なんか」「まで」がそれぞれ、無関係な2つの語彙項目なのではなく、対比の「は」の後接をとおして対応関係を持っていることを指摘する。つまり、対比の「は」の後接という操作は、「など／なんか」「まで」の+L素性を-L素性にする機能を持つということである。

寺村（1991: 114）は、「まで」に「は」を後接させた「までは」という形式について、(21)の例を挙げて、これを「否定の述語とつながることができる」形であると指摘している。詳細な議論はなされていないが、(21)は「反極端」の意味を表しており、寺村の指摘は「までは」という形が「反極端」専用の形式であることを示唆している。

- (21) そんな馬鹿ことを言う者までは、いなかった。 (寺村 1991: 114)

実際に、「など／なんか」「まで」について「は」を後接させると、(22)のように、「など／なんか」「まで」を「極端」として解釈することができなくなる。「などは」「なんかは」「までは」という形式を自然に用いるためには、(23)のように述部に否定辞を追加して「反極端」として解釈する必要がある。

- (22) a. *この大学の学生は、試験前なのに、のんきに漫画などは読んでいる。
 b. *よりもよって、映画女優なんかは隣に住んでいる。
 c. *驚くことに、ワイドショウまでは2人の対決を取り上げた。
- (23) a. もちろん、本当は俺のことなどは見ていないに違いない。
 b. もはや2人の間に菌の浮くような言葉なんかは必要なかった。
 c. ニワトリ小屋なんて、いちいち形まではおぼえていないのが普通だ。

「は」には、主題の「は」と対比の「は」が存在するが、奥津（1986）、沼田（1986）は、対比の「は」のみが連体修飾節内に収まることを指摘している。(23)の「は」に関しても、(24) (25)

に見るように、連体修飾節内に収まる。このことから、これらの「は」は、対比の「は」であると考えられる。

(24) [暴力団などはない] 町 (を作ろう。)

(25) [全国大会にまではいけなかった] 部員 (もよく頑張った。)

つまり、「極端」の「など／なんか」「まで」に対比の「は」を後接させると、「反極端」の用法に限られるということである。

動詞句やアスペクトなどの低い階層に位置していたとりたて詞が、対比の「は」を後接させることで否定と呼応するように変化する現象は他にもある。宮地(2007)では、「しか」に代表される、否定と呼応関係にある「其他否定」のとりたて詞の成立に関して、副助詞に他の係助詞を後接した形を経由していると推測している。特に「しか」に関しては、他の形式や方言を手掛かりに、「しき」に「は」が後接して成立したとする松下(1928)の説を仮定している。

「しか」に関しては、すでに否定呼応専用の形となり、現代語においては「は」を後接する前の形式を失っており、「しきは」「しかは」などの言い方は存在しない。一方、「など／なんか」や「まで」に関しては、否定呼応を持つ形式と持たない形式の双方を保っている。そして、「反極端」の「など／なんか」「まで」は、「しか」と同じように、対比の「は」がなくとも否定と呼応する形式となっているのであり、言い換えるならば、「反極端」の「など／なんか」「まで」は、「極端」の「など／なんか」「まで」に「は」を編入し、+L素性を-L素性にした形であるといえる。

5. 他のとりたて詞への拡張

ここまでは、「極端」と「反極端」の「など／なんか」「まで」が対比の「は」の後接という現象をとおして対応関係にあることを指摘してきた。5節では、この指摘が他のどのようなとりたて詞に観察可能なのか、その範囲を記述しておく。

「など／なんか」と類似したとりたて詞には、「なんぞ」「とか」などが存在する(cf. 沼田2009)。これらについても現象を観察すると、これまでに見てきた「など／なんか」「まで」と同様に「極端」の用法と「反極端」の用法が可能であり、「極端」の用法の場合、格助詞を後接可能であることがわかる。さらに、「など／なんか」「まで」と同様に、対比の「は」を後接させた場合は「極端」としては解釈できなくなることがわかる。

(26) あいつは医者に注意されても、平気でショートケーキとか {を／*は} 食べるんだ。

(27) 働きもせず、ギャンブル {なんぞに／*になんぞは} はまっている。

さらに、(28) (29) のように「とかは」「なんぞは」という場合は「反極端」の用法に限られる。

(28) 当然、医者に注意されたら、ケーキとか {φ／は} 食べないよ。

(29) 当然、ギャンブルになんぞ {φ／は}、はまっていない。

一方で、「極端」と「反極端」の対立が見られないとりたて詞もある。「なんて」は、野田(2015)

では「反極端」のとりたて詞として挙げられているものである。「なんて」は、「など／なんか」「まで」と異なり「極端」の用法を持たない。

(30) *信じられないことに、花子は初対面の赤の他人なんてをすぐに信用する。

(31) 当然、花子は初対面の赤の他人なんて信用しない。

重要な点は、この「なんて」は「極端」と「反極端」の対立を持たないのに合わせて、「は」の後接も許さないことである。この点は、ちょうど「しか」が「しかは」という形を許さない点と共通している。

(32) *当然、花子は初対面の赤の他人なんては信用しない。

逆に、「反極端」の意味を持たないとりたて詞も存在する。(33)に見るように「極端」の意味を表す「さえ」は、「反極端」の用法を持たない。

(33) a. よりにもよって、花子は初対面の赤の他人さえすぐに信用する。

b. #当然、花子は初対面の赤の他人さえ信用しない。

cf. 当然、花子は初対面の赤の他人 |など／なんか／まで| (は) 信用しない。

そして、このようなとりたて詞もまた、「さえは」という連続が許されないということからわかるように、「は」の後接させることができない。

5節での観察をまとめると、次のようになる。

(34) 「極端」と「反極端」の両方の用法も持つ「など／なんか」「まで」「なんぞ」「とか」は「は」の後接が可能だが、どちらかの用法しか持たない「なんて」「さえ」は「は」の後接を許さない。

6. まとめと展望

本稿の主張をまとめると次のようになる。

(35) 「など／なんか」「まで」は、1形態で、構造的に低い位置と呼応関係にある「極端」を表す用法と、否定辞と呼応関係にある「反極端」を表す用法の2つの語彙項目がある。

(36) 「極端」の「など／なんか」「まで」と「反極端」の「など／なんか」「まで」は、対比の「は」の後接をとおして対応関係にある。

(37) 「極端」と「反極端」の両方の用法も持つ「など／なんか」「まで」「なんぞ」「とか」は「は」の後接が可能だが、どちらかの用法しか持たない「なんて」「さえ」は「は」の後接を許さない。(34) 再掲)

これまで、各々のとりたて詞において、それが位置する文法的階層を明らかにする試みは複数なされてきた。しかし、その中で、構造的に低い位置に現れるとりたて詞と高い位置に現れるとりたて詞はどのような関係にあるのかを指摘するものは見られなかった。一方で本稿は、とりた

て詞のなかには、対比の「は」をとおして2つの呼応位置が対応しているものが存在することを指摘した。

今後の課題として、構造的に低い位置と呼応関係にあるとりたて詞と高い位置と呼応関係にあるとりたて詞の対応関係には、対比の「は」の後接以外にどのような操作が存在するのかを明らかにすることが挙げられる。例えば、「極端」を表す「さえ」や「まで」は、「さえも」「までも」のように、「も」を後接させることが可能である。他にも、(38) (39) に見るように、「反極端」を表す「くらい」は、「も」を後接することで「反極端」とは解釈できなくなる。「くらいも」を自然に解釈するためには、「極端」による解釈にしなければならない。

(38) 当然、太郎は、それくらい $\{\phi / * \text{も}\}$ 知っているだろう。

(39) 太郎は、それくらいも知らないだろう。

つまり、本稿が繰り返し指摘してきた「極端」「反極端」の対立と対比の「は」の後接・編入という操作は、他のとりたて詞や「も」の後接においても援用可能な重要な指摘であることがわかる。今後は、さらなる用例の分析をとおして、前接のとりたて詞と対比の「は」の組み合わせによって、どのような意味の合成が起きているのか、そのメカニズムを明らかにすることが必要である。これらの分析については、今後の課題とする。

参考文献

- 青柳宏 (2006) 『日本語の助詞と機能範疇』 東京：ひつじ書房。
 井戸美里 (2013) 「否定的な評価を表す二種類のとりたて詞ナド」『日本語文法』13(1): 68-83.
 松下大三郎 (1928) 『改選標準日本文法』(徳田政信 (編) (1978) 『改選標準日本文法』 東京：勉誠社).
 宮地朝子 (2007) 『日本語助詞シカに関わる構文構造史的研究—文法史構築の一試論』 東京：ひつじ書房。
 茂木俊伸 (1999) 「とりたて詞「まで」「さえ」について—否定との関わりから—」『日本語と日本文学』28: 27-36.
 茂木俊伸 (2004) 「とりたて詞文の解釈と構造」筑波大学博士論文。
 野田尚史 (1995) 「文の階層構造からみた主題ととりたて」益岡隆志・野田尚史・沼田善子 (編) 『日本語の主題と取り立て』1-35. 東京：くろしお出版。
 野田尚史 (2015) 「日本語とスペイン語のとりたて表現の意味体系」『日本語文法』15(2): 82-98.
 沼田善子 (1986) 「第2章 とりたて詞」奥津敬一郎・沼田善子・杉本武 (1986), 105-255.
 沼田善子 (2009) 『現代日本語とりたて詞の研究』 東京：ひつじ書房。
 奥津敬一郎 (1986) 「序章」奥津敬一郎・沼田善子・杉本武 (1986), 1-27.
 奥津敬一郎・沼田善子・杉本武 (1986) 『いわゆる日本語助詞の研究』 東京：凡人社。
 佐野まさき (2001) 「日本語のとりたて詞の素性移動分析と Minimality 効果」『日本英語学会第18回大会研究発表論文集 (JELS18)』181-190.
 佐野まさき (2007) 「とりたて詞の認可と最小性条件—カラ節と主節との関係を中心に」長谷川信子 (編) 『日本語の主文現象—統語構造とモダリティ』73-111. 東京：ひつじ書房。
 寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味 III』 東京：くろしお出版。
 山田孝雄 (1936) 『日本文法概論』 東京：宝文館出版。

例文出典

- 太宰治「駆込み訴え」…『青空文庫』<http://www.aozora.gr.jp> (2018年3月2日確認)
 国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/ (2018年3月2日確認)

Negative Polarity of *Toritateshi* When the Contrastive *wa* is Adjoined

IDO Misato

Postdoctoral Research Fellow, Theory & Typology Division, Research Department, NINJAL

Abstract

The purpose of this paper is to show that the *toritateshi* (focus particles) *nado*, *nanka*, and *made*, which denote a negative or unexpected evaluation, have two usages: one that requires an overt negative morpheme and one that does not. This phenomenon can be explained naturally by assuming that, syntactically, the former usage has a [-Lexical] feature and the latter a [+Lexical] feature. Furthermore, these focus particles have a particular syntactic correlation. If the contrastive marker *wa* is adjoined to *nado*, *nanka*, or *made* with the [+Lexical] feature, the feature reverses polarity from [+Lexical] to [-Lexical], and the particles then require an overt negative morpheme.

Key words: focus particle, negative polarity, *nado/nanka*, *made*, contrastive *wa*